ARTICLE

変化を生み出す「学び合い」

～ポートランドに学ぶこれからの生涯学習社会～

放送大学客員教授
ポートランド州立大学公共サービス研究実践センターシニアフェロー
吉田敦也

知のトライアングル

学びのスタイルは大きく変わろうとしている。従来図式、すなわち〈教室講義―野外研修〉〈研究―教育―地域貢献〉〈学校教育―社会教育〉〈生涯学習―成人教育〉など組み合わせただけの学び構造では既存の形式的知識の供与に終わってしまうことが多く、アクティブラーニングやハンズオンなどキーワードが飛び交うばかりで、新しい知識や変化のファシリテーションも起こりにくい。経験したことのない地域課題や解決困難とも思われる社会問題への対処に大きな効果を発揮することは期待できない。

一方で、グローバル社会では、研究・教育・イノベーションを「知のトライアングル」として相乗効果させるスタイルへのシフトが始まっている[1]。その方が知識の共創、新しい価値の発見、社会変革をファシリテーションしやすく、領域、専門性、立場、年齢を超えたチャレンジを生み出す可能性が高まる。混沌を乗り越え、健康的に持続・成長していく地域社会の構築にも期待でが持てる。満足度が高まる上に「学ぶことの面白さ」「勇気づける学習」をアピールするメッセージ性や表現力がある。

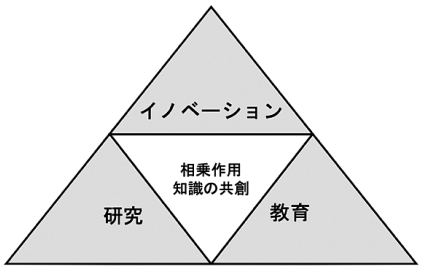


図1　知のトライアングル
（Miettinen.K.,& Mylymaki,HR.,2016をもとに作成）

こうした新しい学びのいわば聖地となり始めているのがアメリカのオレゴン州ポートランドであり、その中核に位置するポートランド州立大学（PSU）である。本稿ではこのポートランドのまちづくり活動とPSUの事例についていくつか紹介し、その教えと日本に与える影響について考える。

最も住みたいまちポートランド

ポートランドはアメリカ北西部のオレゴン州に位置する自然豊かな美しい町である。人口は約64万5千人、コロナ禍による影響は少なからず受けたものの、市政開始以来の一貫した人口増加は止まることなく、18–34歳代を中心

吉田　敦也
（よしだ あつや）
1953年兵庫県生まれ。徳島大学名誉教授、放送大学客員教授、ポートランド州立大学公共サービス研究実践センターシニアフェロー。合同会社テクサラダCEO。研究テーマはインパクトデザインとプロセスファシリテーション。イノベーションの「場」づくり、チェンジメーカー育成、地域の持続を対話出力するフューチャーセンターとエコシステムの形成などに取り組んでいる。

に毎週３００～５００人が国内外から移住してくる。そのことからマグネットシティと呼ばれる。「全米一住みたいまち」ランキングで何度もトップに輝いている[2]。１９８０年から２０１０までの30年間を分析したジャジュビッチらの調査研究によると、その理由は「可能性」「自分らしい暮らし」「子育てに適した環境」だという[3][4]。

「問いかけ」する学習コミュニティ

ではなぜポートランドは人を惹きつけるのか？　様々な角度から調査分析がなされているが、ここではポートランドが「問いかけ」してそれに答えを出していくコミュニティであり、答えを出すための学習を怠らず、成功や失敗から学ぶコミュニティであることに注目する。１９７０年代から２０１０年代の期間に絞って概観すると問いかけには３つのパターンが見えてくる[5]。

１：地域の未来を見据えた暮らし、働き方、社会のあり方、ゴールとは？
２：住民が支持する公共事業が反対意見で実現危うくなった時の突破法は？
３：解決困難な課題を社会全体の利益を生み出す成長エンジンとするには？

問い１は「ハイウエイ革命」という住民運動において掲げられた設問である。ハイウエイ革命は１９７２年から１９７６年にかけての住民運動で、当時国策として進めらた高速道路建設計画を拒否し「人と環境に優しい」まちづくりに向かうことを宣言した出来事である。州知事、市長らを含めた対話を繰り返し自分たちの町のあり方について「立ち止まって考える（Re Think）」ことにした。

その結果に得た答えは「カーフリー社会」である。つまり高速移動／大量輸送の工業化社会ではなく、人の暮らしが中心の健康で幸福なまちづくり、ひとりひとりが創造や生産に主体的に関わりチャレンジする社会の形成である。こうした再考と対話の結果に高速道路路の建設計画は中止され一部すでにできていた部分は撤去された。跡地は緑豊かな記念公園となった。

写真１　高速道路建設を中止して住民の場となった「トムマッコールウオーターフロントパーク」

高速道路の建設を中止して使われなかった予算は「歩きたくなるまちづくり」計画に振り替えられ「人間らしくゆったりした時間を過ごせる」まちづくりが開始された。そして環境に配慮した公共交通網、緑豊かな街路などが実現した。「公園」は重要な都市機能と位置付けられ、新設の際に配慮することを次のようにした。①次世代への遺産となる、②すべての住民に対して多様で高品質な公園と遊びのサービスと機会を提供する、③市内にある自然資源を保全、保護、再生する、④アメリカ西部を代表する「歩くまち」とするためのシステム化を図る、⑤コミュニティの活性化に役立つプログラムを開発／実装する。そして、建設、管理、調査研究に住民が加わる形が一般化された[6]。

問い２は、中心市街地の広場建設にまつわる設問である。デパートの駐車

場をパブリックスペースに変える都市計画事業「パイオニア・コートハウス・スクエア」（裁判所前広場）づくりが始まりデザインコンペに162件の応募が集まった。その中から選ばれたプランは地元建築家の作品で高い評価を受けたが、建設直前に町の有力者の反対の声があがり白紙に戻りかねない事態に陥った。これを乗り越えるため「出来上がった時の未来を現場に下書きする」という突拍子もないことが起こったが、これはイノベーション領域で言うところのプロトタイピングの作業であり、未来を可視化・共有するための場づくりだった。つまり、新しく建設される広場がもたらす「可能性とは何か」を地域に問いかけた。

写真２　駐車場予定地だったパイオニアコートハウススクエア
（６月のローズフェスティバルの時の様子）

描かれた仮想広場は共感を呼び、人々を刺激し「広場の友達」（フレンズ・オブ・スクエア）という応援組織が立ち上がった。寄付者の名前を刻んで広場に敷き詰める煉瓦5万個の販売で75万米ドルの資金を集めた。そして広場は完成し「ポートランドのリビングルーム」と呼ばれるまでになった[7]。

問い3は、現在ではポートランド州立大学との共同キャンパスを持つオレゴン健康科学大学（ＯＨＳＵ）の駐車場問題の解決にあたっての設問である。ＯＨＳＵキャンパスは急斜面に立地していたため附属病院を受診する患者数の増加に対応した駐車場確保が困難に陥った。スタッフや学生にとっても働く環境、学ぶ環境の観点から駐車場は重要だった。一方で安易な解決はしたくなかった。地域医療を担う大学にふさわしい、ポジティブで、健康的で、働きがいのある職場／学舎であり続けることに結びつく方策、さらには地域の交通事情の改善や気候変動問題などにも貢献するイノベイティブなアイデアが求められた。

糸口はあった。事前調査からは「職員の約30％はドライブ・アローン（1名しか乗車していない自家用車通勤）」、「職員の利用率を50％以下にすればなんとかなる」ことが判明していた。

そこで提案されたのが「自転車プログラム」だった。ポートランドは自転車の街と呼ばれ地域の文化だった。また自転車は健康的でコストがかからずほとんどの人が保有している。もちろん、働く人のなかには通勤途中に子どもを保育所や学校に送迎する人もいる。昼夜の区別がない医療業務には自動車が必要な場合がある。これらを考慮の上で通勤スタイルを変える社会実験が始まった。

参加者を増やすためキャッシュインセンティブプログラムが導入された。自転車通勤した職員に対して1日1・5ドル（約150円）の報酬を現金で支払うというものだ。公正性の観点から、徒歩通勤、公共交通機関の利用もキャッシュインセンティブの対象とした。通学にも適用された。

支払いの条件は、①通勤距離は2マイル（3・2キロ）以上、②公共交通を使うことを組み合わせてもよい※注1、③登録メンバーは経路や距離などを毎日webサイトから記録／報告する。

この３番が最も重要なポイントで、つまりは社会実験の進行と効果をデータ化して可視化する手法とした。もちろん記録は管理者だけでなく参加者全員にフィードバックされた。インタラクティブマップにはキャンパス内の自転車関連施設が表示された[7]。

２００８年から２０１１年の３年間に自転車通勤者に支払われた総金額は５２３００ドル（約５５０万円）となり年々増加した。２０１１年にはプログラム参加者は１２０１人、２０１７年には６７４４人となった。全教職員／学生の10％がプログラム参加したことになる。累積総走行距離数は２０１７年時点で９、０５５、３３０キロ、通勤／通学距離の平均は14・４キロ、１日16キロ以上の通勤／通学者は２７３８人（２０１７）に達した[8]。

興味深いことは、本プログラムへの参加動機はお金ではなかった。調査結果によると参加動機の１位は健康、２位は時間の節約、３位がお金であった。環境への配慮は４位にとどまった。自転車通勤に影響する要因は風雨ではなく気温で６℃以下になると自転車通勤が減少することが分かった[6]。道路の安全も課題となった[9][10][11]。

最終的に自転車プログラムは地域を巻き込んだ社会共創プログラムへと発展し、駐輪ビジネス「バイクバレー」をスタートアップする若者（当時23歳）などが登場した。バイクバレープログラムは職場に到着した際にＩＤカードをタブレットにかざすだけで駐輪を代行してくれるサービスでクイックにオフィスに向かえることから好評だった。また、市の交通局はキャンパスの高低差を克服するゴンドラ設置プランを観光事業との抱き合わせで支援することになり地域の利便性と自転車通勤の持続性を高めた。

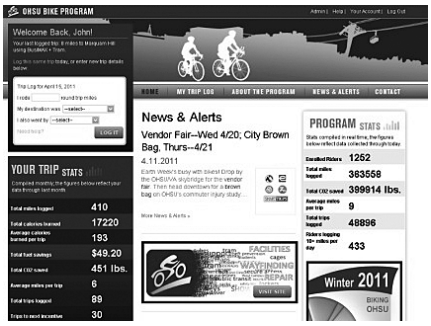


図２　OHSU自転車プログラムダッシュボード
（Webサイトにて公開された記事より）

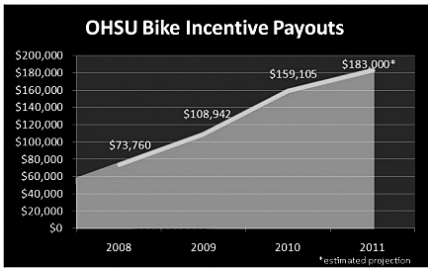


図３　OHSU自転車プログラムで支払われた報酬額
（Webサイトにて公開された記事より）

何を学ぶのか？

ここに紹介した３事例から学びとることは、第一に、大目的を設定する重要さである。そのための学習課題は、根本問題にアプローチして、自分や地域が何を目指すのかを明確にして意思表示する姿勢をもつこと。暮らし、働き方、自然環境、伝統文化芸術、科学技術などに関する多様な話題に耳を傾けること。自分のことを包摂的な立場から相手に伝える対話力を養うことである。

第二のことは、変化に向かうことの大切さである。そのための学習課題は、

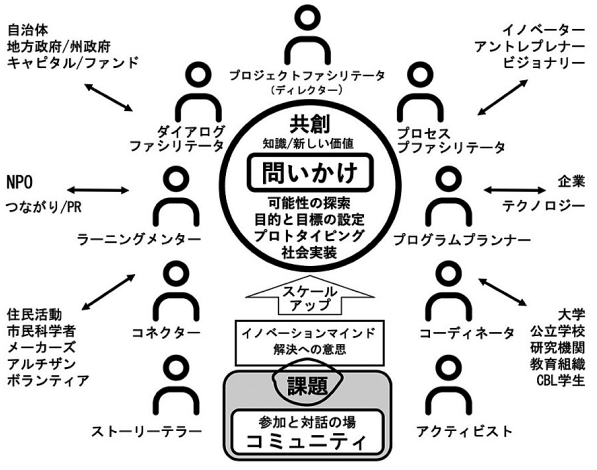


図４　学習コミュニティまちづくりフレーム
ポートランドのまちづくり40年の歴史と事例から筆者が読み解いた試案

個や社会に起こりうる未来（可能性）を探索し可視化し共有する意識と手法の獲得である。加えて、事前の予測と判断に必要な材料を収集する力を持つことである。

第三は、共創におけるテクノロジーの活用である。そのための学習課題は、身の回りにある先端技術をまずは使ってみることである。そして人と人のつながりや生涯学習支援への作用と効果を体験してみることである。リモート型ミーティングについても同様である。

「知識を町に役立てよう」ポートランド州立大学

ポートランドの社会がまちづくりや住民の学習に刺激を与えて変化を加速している理由はもちろん教育の成果だと考えられる。多様性とユニークさを重んじるポートランドでは子どもから成人まであらゆる世代に対して教授法と学習プログラムは豊富に提供されており、立場、年齢、性別、国籍などを意識しない人材育成や実践の実効性を高めている。そのひとつがポートランド州立大学（ＰＳＵ）である。

ＰＳＵは１９４６年創立された公立大学で「知識を町に役立てよう（Let knowledge Serve the City）」をモットーにユニークな教育プログラムを展開している[12]。７つの学部（２つのカレッジと５つのスクール）から成り教職員数は３０００人を超える。そのうちの約７５０人はアカデミックプロフェッショナル（ＡＰ）やマネージャーと呼ばれるポジションに就いている人たちである。ＡＰはアカデミックな専門知識を有した実務責任者として教養教育や地域実践プログラムなどを担当している。

学生数は学部と大学院を合わせて約２万４千人だが、年齢、人種、国籍の分布は他大学とは異なる様相にある。例えば、米国の大学では一般的に18–21歳の学生は約60％であるのに対してＰＳＵでは28・９％である。つまり大多数は22歳以上の学生でその内訳は22–24歳：20・４％、25–29歳：22・２％、30–34歳：11・４％、35歳以上が15・８％となっている。学科によっては学生の平均年齢が34歳というところもある（公式Ｗｅｂサイト２０２０年秋のデータより）。これらの数字が示していることはＰＳＵが社会人にも有用な教育学習プログラムを提供しており、一旦社会で仕事に就いた人の学び直しに機能しているということである。

学生の約80％はオレゴン州の出身であるが、国際的には78カ国からの入学がある。また、学生の25％は子どもがいる学生であり、そのため授乳室や育児設備付きの学習室がある。また、リソースセンターと呼ばれる子育て支援室があり、教職員も利用できる。その他、ジェンダーフリーのトイレ、フードバンクと連携した学生の食生活支援システム、学生が運営する大学放送局や新聞社もある。

キャンパスにある広場では毎週土曜日８：30～14：00までファーマーズマーケットが開催される（写真）。ポートランド最大規模のもので運営するＮＰＯが公開しているデータによると毎回１００を越える店舗が並び、１００００人～１５００人が訪れる。経済効果は８００万ドル（約８億７千万円）とされ米国内でもトップクラスの規模となる（２０１７年データより）。また、歩いて数分の駐車場にはフードカート（屋台村）がある。世界各国の料理が低価格で食べれることからランチタイムは長い列ができる。

このようにキャンパス全体で学生や教職員の生活支援プログラムやイベン

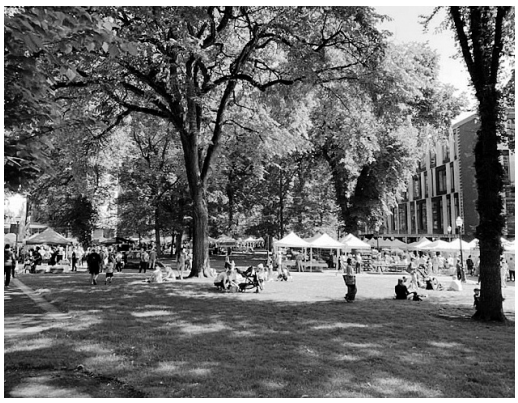


写真3　ポートランド州立大学キャンパスでのファーマーズマーケット

トがありイノベイティブなチャレンジを刺激するデザインがなされている。共同体意識を高め学習への意欲を引き出している。

「壁の無い教室」ユニバーシティスタディズとキャップストーン

PSUでは1994年からユニバーシティ・スタディーズ（UNST）と呼ばれる4年制の一般教養課程を導入している。4年間の履修で完結するユニークな「CBL（地域に根ざした学習）」となっている[12]。

1年次と2年次においてはクラスメイトとつながることが重視され学習コミュニティを形成する。同時に、自分たちの町、世の中にはどんなテーマや課題があり、自分の興味がどこに向いているかを探索・発見する。3年次は、テーマを一つ選び、専門領域と結びつけつつ、しかし自分の専門だけでない領域横断的な学習環境で掘り下げる。最終年度の4年次においては地域コミュニティーの課題に取り組む「シニアキャップストーン」を受講する。

キャップストーンは、1990年代に米国で考案されたもので公共政策・公共行政分野における実践的教育プログラムである。エジプトのピラミッドの頂点に設置される石のメタファーであるが4年間の学習プロセスの「総仕上げのを総合的に経験する」ことがポイントとなっている[13]。

PSUの公式Webサイトによると、ユニバーシティ・スタディーズの目的は「生涯学習の基礎となる知識、能力、態度の獲得」である。そのために、①コミュニケーション、②探求と批判的思考、③多様性、公正性、社会的正義、④倫理、エイジェンシー（自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく姿勢・意欲）の4つのゴールを設定している。また、（1）学習者（学生）と指導者（教員）が関係性を超えて対話しその過程を通じて自己効力感を形成するよう刺激する、（2）自己を振り返り再認識する変容学習を効果させるための生涯にわたる教授の実践を喚起する、（3）先進の住民参加、振り返り、教授・学習の学識、に取り組むとしている[14]。

PSUの西芝雅美教授とUNSTの協力を得て筆者が体験したシニアキャップストーンクラスは、ひとつは、UNSTシニア・インストラクターのセリーン・フィッツモウリス先生の「気候変動」に関するクラスである[15]。その日はティーチ・インという手法で学生が授業担当し、学生が開発した環境汚染を防ぐためのゲームを3チームに分かれて競い合った。汚染源となる工場が増えたら環境保全に役立つ土地を増やす。そのための管理や売買をものすごいスピードで進める学生たちに圧倒された。一方で、フィッツモウリス先生はUNSTで教授支援ファシリテーターするだけあってそれを見事にマネジメントする。教授法のレベルの高さに感服した。

もうひとつは、キャサリン・ハウエ

ル特任教授が担当する「ポートランドの水－森から蛇口へ」というクラスであった[16]。こちらはポートランド水道局との連携で行われているもので、「水道」というもについて知り、世界の水瓶のひとつとされるオレゴンの水の保全についてアイデアを出していくという内容で進められていた。さまざまな学部から、そして多様な国から集まった学生は専門領域や母国の状況を踏まえて課題解決するアイデアを出し合っていた。例えば、映像専攻の学生は将来このクラスで学んだことを土台に映画を制作したいと言っていた。印象に残ったのは、ハウエル教授は、これは世界にひとつしかない授業であると強調していたこと。また、ゲストを招き、インパクトのあるインプットからアイデア創出や思考をファシリテーションする手法で授業運営されていた点である。

「振り返る学習」CBL：コミュニティ・ベースト・ラーニング

ユニバーシティスタディズの柱となっている教授法はCBL：コミュニティ・ベースド・ラーニングである。CBLを日本語に翻訳すると「地域に根ざした学習」であるが、日本で行われている地域連携学習あるいは地域貢献型教育とは異なる部分もあり、PSUモデルを導入する場合には内容と本質を正しく理解することが重要である。

また、日本人向けCBLワークショップを主催するPSU公共サービス研究実践センター（下記）の西芝雅美教授によると、CBLはサービスラーニングという名称でも知られているが、PSUでは意図的にCBLをサービスラーニングと呼ばない方向にある。理由は、大学とコミュニティとは対等なパートナーシップを形成していること、また、地理的なコミュニティに限らず、共通の背景、活動内容、関心事で形成されるコミュニティも対象となることからである。

CBLの目標は、学生がそれぞれの学問分野における知識をコミュニティの課題解決に役立て、社会に貢献できる人材になることである。学生は各専門分野における知識を深める。パートナーシップ、チームワーク、果たすべき役割や義務、実践に役立つ知識、技能、経験について体得する。リーダーシップの持続、文化の接続、新しい文化形成、多様性と包摂性などについて視野を広げていく[17][18]。

CBLを取り入れている大学はPSUに限らず全米、全世界で増加している。また幼児教育から大学まで幅広く導入され始めている。そのなかでPSUがパイオニアとして位置づけられているのは、PSUでのCBLの位置付けが全学的なもので一般教養、学部教育のいずれであってもCBL体験する体制が整備されていること。都市型大学として周辺のコミュニティと連携した教育研究活動を推進し、CBLやコミュニテイを研究テーマにすることが実績評価の対象となっていることなどによるとされている[19]。

「変化とイノベーションの触媒」CPS：公共サービス研究実践センター

PSUでのCBLの取り組みが実効性高く展開されていることに関してはハットフィールド行政大学院に設置されているCPS：公共サービス研究実践センターの存在とアクティビティに注目したい。

CPSでは「理論、研究、実践の統合を図り、行政やNPOなど公共機関と民主的ガバナンスの正当性と有効性を

高める」ことをミッションに掲げて、行政、ＮＰＯ、まちづくり関係者を対象とした社会人教育プログラムや、研修・教育事業、応用研究・コンサルティング、出版事業などを多様に提供している。そこでは、建設的な変化とイノベーションのための触媒（カタリスト）として作用するようＣＢＬを基軸とした独自プログラムが実践されている[20]。

その中の一つが日本人を対象とした「まちづくり人材育成プログラムJaLoGoMa」である。Japanese Local Governance and Management Programの頭文字を取ってJaLoGoMa（ジャロゴマ）と呼んでいる。２００４年から開始された長い歴史を持ち、２０２１年までの参加者総数は約４００名にものぼる。プロジェクトリーダーの西芝教授によると、もともと東京財団×早稲田大学公共経営大学院×ＣＰＳの３者コラボレーション事業でスタートした「市区町村職員国内外研修プログラム（プロジェクトマネジメント研修）」であり受講者は７週間をポートランドで過ごしたとのこと。それが２００９年から住民主体のガバナンスを学習テーマにした「東京財団週末学校」に変わり、さらに２０１６年から「住民主体のまちづくり」をテーマに変わりＣＰＳ独自プログラム「まちづくり人材育成プログラム」として運営されている。

また、２０２０年度はコロナ禍により、ポートランド訪問が困難となり、E-JaLoGoMaというリモート形式で実施された。そのことによって、これまで参加できなかった人が参加できるようになり定員を大幅に越える64名が受講した。プログラムはオンラインセッションに対応できる構造化がなされ、一層に先進のプログラムへと進化している。

JaLoGoMa では、元ポートランド市役所職員、住民グループのリーダー、アクティビストと称される住民などを加えたワークショップとフィールドワークの形式で、ポートランドで現在進行中の事例を体験しながら学習する。終わったらポートランドビールでビアストーミングする。※1

（※1ただしこの方式での学習はコロナ禍が収束し現地へ行けるようになるまではお休みである）

JaLoGoMaプログラムでは、住民主体のガバナンスを理解し、まちづくりに活かすため、分析・統合、理論化・モデル化、活用・実践の系統的な発動を支援する学習に取り組む。参加者同士、講師、話題提供者などとのつながりを重視しておりそれを持続的なものにするためのネットワーキングセッションなども導入されている[21]。筆者自身が２０１９年に受講した経験からは、「生み出す力」を養成する非常に高品質なプログラムと感じた。一緒に学んだ受講者の様子からは、自分の立ち位置から達成できそうなチャレンジを発想したら勇気をもってアクションを起こそう！という雰囲気が湧き起こっていた。

JaLoGoMaプログラムは、プロジェクトのコアスタッフを中心に多くの人が関わって運営されていることも大きな

写真４　ポートランド州立大学キャンパス
公共サービス研究実践センターのあるポートランド州立大学
ハットフィールド大学院行政学部前

特徴となっている。プロジェクトリーダーのPSU西芝雅美教授（ハットフィールド大学院行政学部学部長でCPS副センター長）によるとこれまで400名もの人が運営に参加し、そのなかには日本の教員、留学生、通訳可能な人、PSUの学生、地域のボランティアなどが含まれる。

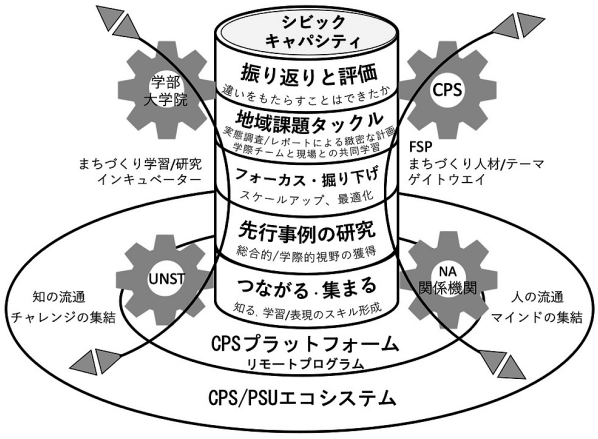
「日本の変化を導く学習基盤」JaLoGoMaエコシステム

CPSの「JaLoGoMa」プログラムはアメリカから日本の社会変容に大きなインパクトを与えている。ネットワークは拡大しており、日本JaLoGoMaアラムナイが組織され「JaLoGoMaファミリー」は太平洋を挟んだ巨大エコシステムとして先進の学習基盤に成長の兆しさえある。

JaLoGoMaに限らず、PSUやCPSと関わりを持ったことから変わりつつある日本の大学や都市は多い。現在はコロナ禍で往来は停止／休止されているが、協定締結して、学生の研修プログラムを企画／実施したり、PSUモデルのCBLセンターを新しく設置する大学は増加している。

都市開発やまちづくりを刺激する事例も増加しており、例えば、北海道の札幌ではJaLoGoMaアラムナイの有志が姉妹都市60周年記念事業としてクラウドファンディング方式で資金を集め、ポートランドと連携した「サッポートランド」60人ビールを製造／販売した。完売してブランド化にも成功している[22]。

また、JaLoGoMa受講後、人生を考え転職した人もいる。きちんとインタビュー調査したわけではないので断定できないが受講者に変化をもたらしチャレンジを生み出していることは間違いなさそうである。



CBLを基軸にしたJaLoGoMaエコシステムから考える
CPS型まちづくり学習ファシリテーションモデル（試案）

「問いかける」大学

2020年12月11日のことだった。ポケットのなかのスマホがブルっと震えてPSUのオンラインライブ公演が間もなく始まると知らせてきたのでパソコンに4Kテレビを接続してスタンバイした。

コンサートタイトルは「スティル・ウイ・ライズ」。PSU合唱団の指揮者であるイーサン・スペリー寄附講座教授は冒頭こう呼びかけた。LET SINGING SERVE THE CITY：唄うことでまちに貢献しよう！　曲はアメリカの詩人で公民権運動のアクティビストであるマヤ・アンジェロウの「Still I Rise」。すばらしい深淵な歌声が感動と安らぎをもたらした[23][24][25]。

収束の目処が立たず学生も教職員も大学に登校できない日々が続くコロナ禍の中、黒人ジョージ・フロイトさんの不当逮捕と殺害事件でアメリカに再び巻き起った人種差別問題によりBlack Lives Matter（ブラック・ライブ・スマター）運動が全米に広がりポートランドでも鎮魂と抗議デモが繰り広げられた。そんな時、スペリー教授と学生ら

は、蜜を避けるため屋外での練習の繰り返し、舞台アートや音響スタッフの協力を得て、合唱とその選曲でジェントルに社会へメッセージした。

社会が共有すべき大きな問題や課題を共に考えようとするＰＳＵの姿勢とアクションは、人々に勇気を与える。同時に、大学のあり方、学びの本質、そして、今、私たちは今何をなすべきか、についてタイムリーに「問いかけ」ている。答えはそれぞれかもしれないが、ポートランド州立大学ファミリーであること誇りに思い、自分のタイムラインでシェアした。

謝辞

本稿の執筆に関連し貴重な情報共有とディスカッションをくださいましたポートランド州立大学ハットフィールド大学院行政学部学部長で公共サービス研究実践センター副所長の西芝雅美教授に感謝申し上げます。同センターの国際関連プログラムコーディネーターの飯迫八千代先生に感謝いたします。

文献

[1] Miettinen.K.,& Mylymaki,HR.,(2016) Lifelong learning and the knowledge triangle in the context of university reform. A case study, In the Book "Universities and Engagement,- International perspectives on higher education and lifelong learning, Edited by John Field, Bernhard Schmidt-Hertha, Andrea Waxenegger, 66-89, Routledge, New York.
[2] 山崎満広（２０１６）ポートランド-世界で一番住みたい街をつくる、学芸出版社
[3] Jason R. Jurjevich, Greg Schrock and Jihye Kang (2016) Talent on the Move: Migration Patterns of the Young and College-Educated in Pre and Post-Recession. https://core.ac.uk/download/pdf/84827236.pdf
[4] Jason R. Jurjevich, and Greg Schrock (2012) Is Portland Really the Place Where Young People Go To Retire? Analyzing Labor Market Outcomes for Portland's Young and College-Educated
[5] 畢 滔滔（２０１７）なんの変哲もない取り立てて魅力もない地方都市 それがポートランドだった：「みんなが住みたい町」をつくった市民の選択、白桃書房
[6] https://www.portlandoregon.gov/parks/40182
[7] https://www.thesquarepdx.org/
[8] https://bikeportland.org/2011/04/19/cash-incentives-spur-bike-commutes-at-ohsu-51335
[9] https://bikeportland.org/wp-content/uploads/2011/12/Bike_Program_2011_Report.pdf
[10] https://www.ohsu.edu/sites/default/files/2018-12/transpark-commute-rewards-brochure.pdf
[11] https://www.ohsu.edu/sites/default/files/2019-07/OHSU_TDM_Strategy_Dashboard_web.pdf
[12] Wortham-Galvin B.D., Jennifer H. Allen, Jacob Sherman(Eds)(2016)Let knowledge Serve the City, Greenleaf Publishing, UK.
[13] Portland State University(2021) University Studies, Portland State University Official Site, https://www.pdx.edu/university-studies/about-unst
[14] Ryan Brown,C.R., Dillon,G.L., Fitzmaurice,C., Jacob,G., Labissiere,Y., Muhanji,C., Reynolds,C., Straton,J., (2005) Varying Realities of the Human Experience: University Studies Program at Portland State University, Portland State University, 93-106. https://pdxscholar.library.pdx.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1045&context=studies_fac
[15] https://capstone.unst.pdx.edu/courses/rise-for-the-planet
[16] https://capstone.unst.pdx.edu/courses/portlands-water
[17] Wortham-Galvin B.D., Jennifer H. Allen, Jacob Sherman(Eds)(2016)University-Community Partnerships, Greenleaf Publishing, UK.
[18] 吉川 幸、前田 芳男（監修、翻訳）（２０２０）市民参画とサービス・ラーニング―学問領域や文化の壁を乗り越えて学びたい学生のために、岡 山 大学 出 版会、原 本：Christine M. Cress, Peter J. Collier, Vicki L. Reitenauer(2005) Learning Through Serving: A Student Guidebook For Service-learning Across The Disciplines, Stylus Publishing, LLC
[19] 西芝雅美・飯迫八千代（２０２１）「イノベーティブな学習支援技法２：学びを引き出す仕掛け」―赤尾・吉田編著「生涯学習支援論」10章、pp.１５９－１８４、放送大学（印刷中）
[20] https://www.pdx.edu/center-for-public-service/
[21] https://sites.google.com/view/jalogoma-psu
[22] https://colocal.jp/news/128490.html
[23] https://www.pdx.edu/news/let-singing-serve-city?fbclid=IwAR3gj6cKJpjENZcBiR0GNVjgV7Jf3DzkqLUejGA9IFXNkWDaDCMOfcAERrwiOJWGe6XzE
[24] https://www.youtube.com/watch?v=RTZbetLxCYY
[25] https://www.youtube.com/watch?v=